
ある日、天使が堕ちて来た！

かとう みき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ある日、天使が堕ちて来た！

【Nコード】

N6406X

【作者名】

かとう みき

【あらすじ】

ある日天使が堕ちて来た、と思ったら異世界人だった。図々しくも弟として家庭に入り込み、天然おバカを装う腹黒い異界人。最初に罠にかかり、弱味を握られ、言質をとられ、仕方なしに色々協力する内に、どうやら退屈な毎日を送っていた筈の日常は、異界人が来る前から相当オモシロイ世界だったと気付く羽目に？大嫌いな異界人を元の世界に戻して、さっさと日常を取り戻す為に頑張る日々。（多少BL要素有ります。嫌いな人はご注意下さい。が、好きな方の期待に応えられる程のラブもホモも有りません。）

完結予定日まで。

他の作品にアクセスが集中したので保留中。
します。

リク戴いたら優先

1話 天使！？

ある日、天使が堕ちて来た。

いや、比喻でも冗談でもなくてさ。本当に、実際に、墮つこちて来たんだ。

白い翼を持ってた。

ふわふわの、柔らかい羽毛。その純白の輝きは、マジで目がチ力チ力する程に眩しかったさ。

でも、もっと眩しいのはその髪。そして、その顔。

俺はその髪と美貌に、先ず思ったね。

「すげえ。……………」

何か云おうとして、何とも云い難い事に気付いた。

貧困なボキャブラリーじゃ、せいぜい綺麗とか美しいとか麗しいとか、もうそのものでしかない言葉しか浮かばないんだが、余りにも本気で「綺麗」なものだから、かえって口には出来なかったんだよ。

輝くばかりのって云うが、実際に輝いてんだもん、その人。って人間じゃないけどさ。

白くって綺麗で、ああ、清潔そうってのピッタリかも。

無垢ってのかな。

「すげえや。」

銀色に青とか碧とかを溶かしてグラデーションをかけたみたいな髪は、見事に波打っている。

白ってより、クリーム色って感じの肌は、柔らかそうで、滑らかで、ホクロひとつないんだ。

キョトンと見上げる眸は、何てえか、紫色でさ、バツバサのまつ毛が頬に影を落として、キョーアクに可憐、なんだ。

ああ。

認めるしかないだろう。

俺は恋をしたんだ。

この天使に。

だからと云って、一足飛びにそんな事をしなくても良かったのでは無かるうか？

自分自身、そう思わずには居られない。

俺はベットに座り込んで煙草を吸っている。未成年だが見逃してくれ…吸わずにはおれないんだ。

見下ろせば、心臓に悪いキレイな生き物が居る。

白い手足を投げ出して、呆然とした眸が天井を見上げている。

シミひとつ無かった肌には、今はいくつかの擦り傷と鬱血の痕があつて――。

そう。つまる所は。

犯っちまったのである。

……………。

だってだって、どうすれば良かったんだよ！？大体やりたいサカリの17才の部屋に堕ちた天使が悪いだろう！

天井に穴があいてるとか、窓が割れるとか、せめてそんな現実味が有れば、まだ違ったかも知れない。

けど、実際には、音もたてず、いきなり空間に出現して、トスンとカーペットの上に落っこちたんだよ。へたりこんで、キョトンとした眸で俺を見上げてた。

驚いたのはこっちだろう！？

薄い衣は、布が少な過ぎた。胸元は刺激的な迄に眺めがよく、立てた膝もヤバかった。

おまけに、翼まで生えてんだよ。

現実だなんて思えるかよ。
いや。

例え、夢にしろ。

そんなつもりはなかった。

恋を……してしまつて。

好きに……なつて欲しいと、思つて。

優しく、接するつもりで……

なのに。

その手を取つて、その髪だか、肌だかから……薰る匂いにクラツと来て。

次の瞬間

思わず。

抱きしめてしまつていた。

そうしたら、ますます強く香り、相手は呆然としてるのか抵抗らしき抵抗もなく、………なだれ込んだ。

うわあ！

めっちゃケダモノって云わねえ！？

自分で自分がイヤになるだろう。俺だつて！俺だつて、まともに口説きたかつたのにつ……！

しかし、犯っちゃつたもんは仕方ない。

チラツと、見下ろすと……紫の眸はようやく判断力を得たように瞬きを二度三度、でもつて、視線が……真っ直ぐ、俺に来た。

「……………」

すこうし、細まつた眸に、俺はドキドキした。

ケダモノ……とか、最低……とか、そんな台詞を予想してはみたが、そもそも日本語なんて出来るんだろうか？

しばらく、無言で、ニラみ合つた。

ちよつとドキドキした。

見つめ合つてゐたいで………ってノーテンキかよ俺は！とも思うが、多分、俺が動揺しまくっている事なんて、端からは全然解んな

いだろう。

俺はクールな美少年と呼ばれている。

性格を無視したその評判が根強いのは、俺が無表情で寡黙だからだと思われる。

たまに笑うと天使のようだと云われるが、そいつらは結局天使を見た事がないんだな。とは云え、俺も初めて見たのだから。

大概、つらつらと考えている内に、俺と相対する人間は何らかの決断を下すもので、俺はそれを受け入れるか否かを検討するだけで良いんだが、この天使は違った。

じいっと、俺の眸を視つめていた。

何も云わずに。

何ひとつ、見逃さない眸で。

不思議な事に、その眸には憎しみや怒り等のマイナスの感情は浮かんでいない様に見えた。希望的観測に過ぎるだろうか？

それでも、その澄んだ眸は、そんな毒っぱい感情とは無縁のように思われた。

このまま。

ずっと。

朝まで見つめ合うのも悪くない。

悪くは無いが……逃避が過ぎるだろうよ、それは。逃げるのは好きじゃない。

だから、仕方なく、覚悟を……決めた。

問い掛ける。

「名前は？」

紫の眸が揺れた。

そんな質問は予定外だ、と、戸惑っているようにも見えた。けれど、淡く染まった柔らかい唇が開く。

コクリ。

俺は息を呑んだ。

「そちらの…名は？」

サラリとした声。

声までも澄み切って、清らかさんな癖に、どうして「あんな香り」を持っているんだろう。

そんな事を思いつつ、俺は応じた。確かに、俺が名乗るのが先だと思われたから。

「川崎洋。ひろしと呼べるか？」

「ルウイリア」

「ルウイで良いか？」

ルウイは頷いた。

寝そべったままで。

どうやら動けないらしい。

「……バスルームに行くか？」

色々考えて、俺は云った。

ルウイも色々考えるのか眉を寄せて黙る。

「……む」

考えているらしい。

「要らない。」

応えた。

動けないなら運ぼうと、云おうとした言葉は飲み込むしかなかった。ルウイが眸を閉じた瞬間。

彼は、光の球体に包まれて、輝きが消えた後には、シミひとつない肌が、薄い衣に包まれていたから。

傷も、情交の痕跡も、何ひとつなかった。

その証拠に、ルウイはひよいと軀を起こして首を傾げた。

「もしかして、驚いてるの？」

「……」

重々しく、俺は頷いた。

2話 異世界人かよ（前書き）

お久しぶりの「天使」です。

HPの活動報告でも書きましたが、猫被りの世界と微妙にリンクするので、書きたくまりました。

しかし多少は色々出ましたね〜天使⇨賞金稼ぎ等…なんて設定は関係ナイので出ませんが。

でも書きたい台詞はラスト近い、と云うか完全ラスト。

テンポよく読める話を目指すので、最後迄主人公はガサツ&天使にもガツツリ邪険に突っ走る予定です。

やっぱり書きやすい、この話。

でも読んでくれる人居ない……とグレテ居たのですが細々と最近覗いて戴けて、ちよつと嬉しいですww

ボチボチのんびり更新しますので、お付き合いの程、宜しくお願い致しますm（．．）m

2話 異世界人かよ

ちなみに、光に包まれた後のルウイには翼は無かった。そうしてみると、人間に見えなくもない。

「天使？誰が？」

「お前が」

俺は今回、無口で有るのも時と場合によると学ばされた。

幼い頃に、余りの喧しい口を、ガムテープで封印された過去を持つ俺は、必要以上に口を開かない人間に成長したが、生態のはつきりしない相手との対話には、饒舌なくらいが調度良いのかも知れないと思った。

彼も……そう、男だったよ。きつぱり、しつかり男だったよ……いや気付いてはいたさ！だってしちゃったしな！？

でも、天使なら男でも良いかなと思ったのに！天使なら、男みたいでも、男では無いかも！と思ったのに！

女で無いまでも男で無ければ良かったのになあ……。

だが俺は、文句の云える立場ではなかったのだ。

彼も「コチラ」の世界でおかしく見えないよう振る舞う為に、俺に質問を浴びせ掛けた。

ルウイの語ったトコロによると、こうである。

「天使つてのは、女神の使いだからさ。俺は単なる事故だし。うん、コチラで云うなら魔法使い？なんだよ。もちろん人間。」

「人間が何で、そんな髪をしている。」

眸もだ。紫なだけなら、珍しい乍らも有るだろう。よく見りゃ……よく見なくても、左右色違いなのも有るかも知れない。
が。

片方はキラキラと輝いて紫のグラデーションを基調に色を変じた

し、淡いピンクにも見える薄い紫が……光の具合で有り得ない程、キツチリと漆黒に見える瞬間が有る。

髪は髪で光を零すし……有り得ねえだろうよ。

アレだろ？よく云う光り輝くだの、煌めく眸だの、煙る。色だの
って……単なる比喻だろ？実際に光の粒子がキラキラ零れたり煌
めきが滴り落ちたりしねえだろうがよ！？

気迫を込めたが、天使はへロリと答えた。

「フライサって星でね、東国の出身の母親から生まれたから。って、
ああ、そうか。フライサも解ないね……異世界から来たから？
って云うのが正しいのかなあ。」

事もあるうに異世界人だった。

「でも先祖は地球人。」

情報が多過ぎだった。

「…………。何で。」

「地球人が何人か神様方の仲間入りしてえ、うちの世界に根付いち
やったんだもん。もう何万年か前？リー家って結構有名な一族でね。
父方の祖母がその出身なんだよ。」

「何万年も前に地球人が神様にね。」

石のオノでも持っていたかも知れない。

もはや突っ込む気にもなれなかった。突っ込んで更に欲しくナイ
情報が入るのを防いだとも云うな。

これが現実だとしても、こんな知識は無駄以外のナニモノでもナ
イ。

「俺？俺はねえ、フライサの北の国、転^{テン}国の王子でねえ。」

テン……ゴク？しかも王子様と来たか。

おまけに魔法使いだし？

流石に頭痛を覚えた俺は、こめかみをマッサージせずにはおれな
かった。

「翼は翔ぶ為のもので、もちろん生れつきじゃないよ？ちょっと他
所の世界に遊びに行こうとして跳んだら、何故か此処に出ちゃって

ねえ？」

ねえ？じゃねえよ。

それで、男相手の初体験させられた俺は何なんだよ莫迦野郎。
シクシク。

「とりあえず、目に付いた人間に尋ねようと思っても、口聞いてく
れなきゃ翻訳魔法が使えないしさ。」

それでニラミあつてたんかい。

「いきなり強姦されたしさ？」

「……………」

冷汗だらだら心臓バクバクである。

強烈な単語だ。……………今の俺には発音出来んぐっ！！

しかしルウイは余りにも、あっけらかんとしているので、俺は謝
る機会を逸してしまった。

「ところでさあ。地球に来たからには、観光して帰りたいんだけど、
俺のカッコつて変じゃない？」

「メチャ変に決まっとるわ。ボケ。」

「エー。どの辺があ？」

「全部だ。全部！」

先ず髪の色。その長さ！キラキラとグラデーションと同じく眸も
だ莫迦野郎！

いや、バンドの人を差別するつもりはナイのだが。最近のソレ系
バンドはモノホンさながら……………そういうキラキラも付けてる場合有
るな。天然では有り得んが、コレが混じっても……………いや、やっぱ
ダメだ。

こいつの場合は美少女だ。普通に染めたらなおさら美少女で、キ
ラキラ捨てても、やっぱり美少女だ。

「その長さなら女装か……………」

「短くする。」

ルウイが云った途端、彼の髪は短く……………なった。

「……………」

魔法。

魔法ね。

すげエ。

「何？」

キョトンと見上げてくる美少女顔に、俺は首を振った。

とんでもないモノと関わってしまった。

今更だけど、そう思わずにいらなかったね。

「色とキラキラも。眸と髪は日本なら黒っぽい色に。グラデ無し、

色の变化無し。服は……この辺の雑誌見てみる。」

「うーんと。」

雑誌を開くでもなく、彼は考え込む。

チラリと見上げてきて。

「記憶……見せて欲しいなあ？なんて。」

「……………！」

ガタンッ！！

俺はベッドから飛び下りて壁に張りついた。

「犯したくせに。」

「うつ……………」

攻撃のダメージは大きいが……、それとこれとは別だつ。

「いきなりで、ビックリしたし。」

「……………」

ズキズキッ、と突き刺さる何かを感じる。

「初めて……だったのに。」

バツサリ……切り捨てられたも同然である。

息もたえだえ。

「記憶は……………ダメ。他の、事……………なら。」

このさい何でもします。すみません。ゴメンなさい。

心で土下座した。

しかし言質は与えない、俺は我ながら姑息だった。

「記憶って云っても、知識しかもらわないからあ。君の感情や何を

経験したとかが、解る訳じゃ無いのにイ。」

「それを早く云え。」

と云うか。

「何故それを云わなかった。」

「……うん。だって、最初は全部見る気だったから。」

俺が、彼を殴り飛ばさなかったのは、ひとえに罪悪感ゆえであるう。

何とか、けとばしたい欲求を押さえ込む事に成功した俺は、ルウイに尋いた。

何となく、イチマツの不信を抱いたのである。

「初めてだったってのは、本当だろうな？」

「…………。エート…………。」

「ホ・ン・ト・ウ・なんだな？」

低い声で、ほんの少し眸を細めると、ルウイはあさつての方向を見上げた。

「ムリヤリは…………初めて…………かな？なんて」

俺は、自分の自制心が此処まで保つと、今回初めて知ったぜ。いつもの俺なら半殺しだな。間違いなく。

しかし、これだけ腹が立つのに嫌いになれないとはコレ如何に？
実際、やな相手に出逢ったもんだと俺はため息をつかざるを得なかったね。

さっさと帰れ！

異世界につつ！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6406x/>

ある日、天使が堕ちて来た！

2011年11月4日02時01分発行